



私にとって障がいを持つということは「プライドをズタズタに傷つけられてどん底に突き落とされて、そこから這い上がってきた」という感じです。

平成17年に脊髄の進行性難病を発症し、少しずつ歩けなくなり僅か1年で車椅子を使う障がい者になりました。今まで当たり前に行っていたことができなくなっていくことに一喜一憂し落ち込んでいた頃もありました。

障がいを持つようになるまでは、行きたいと思うところはどこでも行けました。段差があったり階段しかない建物も狭い通路のお店でも行けました。やりたいことも自分の意志さえあれば、何でもできました。でも、今は違います。ほとんどが我慢の世界です。まちな出れば、案内表示などの情報、交通機関、建物のバリア、そして知らないでいることからの人の心のバリアに悲しくなることがあります。これは、私が障がいを持ったからこそ気がついたことばかりです。人は自分に関係がないとどうも意識が薄いように思います。

できなくなったことを残念だと思うより、できることをしないほうが残念だと思えるようになり、障がいをもった私だからできることとして社会の環境を変えるための意識や問題点を発信していくことにしました。建築士としてハード面から、そしてソフト面の心のバリアフリーの両方から伝える活動を続けてきました。

自宅の環境は自分のできることを増やしたいと自分仕様の使いやすいものにリフォームしたことで生きる意欲に繋がりました。障がいを持った方、ご高齢でできないことが増えてきた方に諦めないで是非、住宅改修をお勧めしたいと考えます。介護の負担も減ります。

まちの中のバリアがなくなれば、どんなに住みやすい環境になるのでしょうか。旅行、教育、就職などやりたいことができる選択肢が増えること、自分とは違うだれかのことを思いやり行動できる社会、孤独を感じさせない環境が不可欠です。

札幌が障がい者だけではなく、次世代の子ども達の為にも高齢者を含め、全ての人が暮らしやすいまちになることを願っております。



故 牧野 准子

- ・札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会委員等の行政委員に多数参画
- ・(一社)北海道建築士会札幌支部理事
- ・(一社)日本ユニバーサルマナー協会検定講師
- ・(公財)ノーマライゼーション住宅財団理事
- ・札幌市西区身体障がい者相談員
- ・中小企業家同友会札幌支部インクルーシブ委員会
- ・FM三角山放送局「飛び出せ車いす」パーソナリティ
- ・札幌市心のバリアフリー推進事業(令和3～5年度)の委託運営など
- ・平成30年度 北海道男女平等参画チャレンジ賞 輝く女性チャレンジ賞受賞
- ・令和4年(一社)北海道建築士会会長表彰功績顕著者表彰
- ・令和4年(公社)北海道家庭生活総合カウンセリングセンター優良カウンセラー表彰

